

異文化の親密の関係性の構築をめぐる研究

A Study on the Construction of Intimacy between Differing Cultures

レナト・リベラ（京都大学大学院文学研究科 博士後期課程）

【メンバー】

エルナニ・ショイティ・オダ（京都大学大学院文学研究科 博士後期課程）

松谷実のり（京都大学大学院文学研究科 修士課程）

ミロシュ・デブナール（京都大学大学院文学研究科 修士課程）

安井大輔（京都大学大学院文学研究科 修士課程）

【ねらいと目的】

グローバル化した今日の社会において、多文化環境における社交能力は、調和の取れた共存型社会を実現するための必須条件となっている。特に、1970年代以降の労働力の国際移動と、定住者の増加のなかで、現在、ヨーロッパ社会では、異文化間の出会いと共生をめぐる新たな動きが生まれつつある。本研究は、母国から離れ、現地に移住し新しい生活を送ろうとしている様々な外国人たちとのインタビューを通じて、こうした異文化間の親密な関係性が構築されていく様相を明らかにするために準備されたものである。

本研究において、イギリスを中心に、ヨーロッパにおける多文化共存型社会における良好な対人関係に見られる諸要因を分析することにより、親密圏、即ちより豊かで協力的かつ友好的なコミュニティ形成のプロセスを明らかにしたい。

さらに、同様の作業を、日本社会において適用する。ヨーロッパ社会における、異文化の出会いの状況は、日本のそれとどこが同じで、どこが異なるのか。

現在、個人同士の差異を認め合うだけではなく、異なる出身地の民族同士が協力し、一つの共同体を成り立つことが将来の社会の形を生み出すと考えられるため、それらの要因を探る必要がある。

以上、ヨーロッパで生じている、異文化間での新たな親密圏形成の動きを踏まえ、日本社会における今後の多文化共生の親密な関係性構築の可能性を探るための材料とする。

【活動の記録】

2008年11月30日～12月13日

ロンドン調査：ロンドンへ移住した外国人たちにインタビュー（撮影）

参加メンバー：リベラ、松谷

2009年1月12日

「親密性と公共圏の再編成」次世代研究グローバルワークショップにて研究進行報告：
“The Integration of Migrants into Multicultural Societies as Seen through Visual Investigation”

2月3日～11日

東京調査：東京へ移住した外国人たちにインタビュー（撮影）

参加メンバー：リベラ、松谷、安井、デブナール、オダ

【成果の概要】

ロンドン調査と東京の調査を終え、それぞれの地域における状況の特徴を把握できた。テーマにより、いくつかのパターンが見られた。

移住理由：ロンドン調査における回答者は、移住して「自由」を感じるといった発言が多かった（特に若い頃に移住した方の場合）。これに対して、東京調査においてはこの様子は見られなかった。

ホスト社会との接触に関して：ロンドン・東京調査同様、現地の人（イギリス人、日本人）は回答者にとって一般的に「馴染みにくい」存在である回答が多く見られた。現地の人より、外国人の友人が多い場合がほとんど見られた。

国際結婚：国際結婚に関しては、東京調査の回答者には大変な状況を辛うじて乗り越えた方が多かったことに対し、ロンドン調査の回答者では、そのことは全く問題にならなかった。

子育てや子供の教育：ロンドン調査の回答者は、移住先はすでに「拠点」になっており、家族の将来や子供の教育にとっては特に心配はないと見せた。その反面、東京調査の回答者には、子供の教育のために「帰国」するかもしれないという悩みの声が多かった。

最後の「子供の教育」は重要な鍵となる一点であるもう一つの理由としては、ロンドンでは心配を抱えていなく、むしろ母国の言葉も勉強や練習させる傾向が見られた。しかし、ロンドンでインタビューを受けた一人の日本人がロンドンに来た理由は、「子供の教育のため」と発言した。これは明らかに日本の教育制度に不満を感じるのは日本へ移住した外国人に限らず、日本からその理由をもって離れた日本人にも共通することであることが判明している。人が他国へ移住し、「拠点」を求める際、ホスト社会との融合は必要だが、その定義はいまだに曖昧である。自分の中のカルチュラル・アイデンティティと社会のアイデンティティや習慣などのバランスをどの程度移住した外国人を取れているかを探るという目標を持ったこの研究が、最終的に人がどのようにして「拠点・Home」を作り上げるのかという問題に取り組むことに発展した。ネイティブとの結婚で「融合」したことになるのか、また「受け入れ」を感じるときに成功したというのかは、まだこれからも議論が必要である。



ブラジル料理店を撮影



移民が営業する料理店が多い鶴見市